

工学院大学主催
第9回 高校生の建築フレッシュ・アイデア・コンペ

文の部門 最優秀賞

「好意と行為のブツブツ交換～その町にずっと住み続けるために～」
東京都立工芸高等学校 須賀友美さん

好意と行為のブツブツ交換

～その町にずっと住み続けるために～

今回の課題のテーマを「町」に定め、住み続けられない現状を分析、ポイントは愛着の有無であると考えた。その愛着を持つためには住民同士のコミュニケーションが重要であり、これを活発にする手段として、「好意と行為のブツブツ交換」と名付けたシステムを提案した。これは子供、大人、お年寄りが世代を超えてコミュニケーションを取りやすくする仕組みである。同時に、その中心となる公園での活用方法や将来像を提示した。

好意と行為のブツブツ交換 ～その町にずっと住み続けるために～

日々変わり続ける町の中でも、住み続けることで生まれる地域住民とのコミュニケーションの輪や思い出の場所は、その人の人生にとってかけがえのないものになるはずだ。だが一方で、暮らした町に愛着を持たずに出て行く人も多いように感じる。なぜなのだろう？ 私は生まれ育った町での数えきれない思い出や、顔見知りの近所の人たちとの触れ合いの中にこそ、町への愛着や心の豊かさが生まれると思う。

そこで私は、自分の町に愛着を持ちずっと住み続けたいくなるような一つの仕組みと、その中心となる公園の将来像を提案したい。

【住み続けるための課題とは】

住み続けると町はどんどん姿を変えて行くのが分かる。私の町も私が生きてきた17年の間でさえないが変わってしまった。大きな駐車場だった場所はいくつもの住宅が並び、ファーストフード店は短いスパンで開店、閉店を繰り返している。その中でもショックだったのが、よく行っていた公園が味気ないものに整備されてしまったことだ。公園の景色が変わってしまうと小さな頃に遊んだ思い出も無くなってしまいう気がして、とても寂しかった。私の町以外でも最近の公園は、管理の都合から砂利や土の道は舗装され、子供たちが危なくないようにと怪我の起きた遊具はすぐ撤去されると聞く。そんな遊具に限って子供たちに一番人気のあった遊具なのだ。公園の姿が変わってしまうのは、そこで遊ぶ子供たちにとっても、かつて遊んでいた人にとっても寂しい事だろう。

町と同じように、そこに住む住民も移り変わる。新しい住民が入ってきては、顔見知りの住民が遠い町へ引っ越していく。私も寂しい思いをしながら多くの友人を送り出してきた。

しかし、今ではそんな移り変わりが当たり前ようになってきているように思う。

この経験から、なぜ引っ越しをしなければならないのか考えてみた。

- ① 職場、学校、病院が変わった、遠くなった
- ② 交通機関を利用しにくい
- ③ 町の治安や環境が良くない
- ④ 家族構成が変わった
- ⑤ 家の買い替え

他にも町を出ていかなければならない理由はたくさんある。だが一番の理由はその町に愛着を持たなかったことなのだろうと思う。なぜなら愛着が強ければどんなに不便でも住み続けたいと思うはずだから。

つまり、不便を越えてまで住みたいくなるような「愛着」をどうやったら持てるか、が住み続けるための課題なのである。

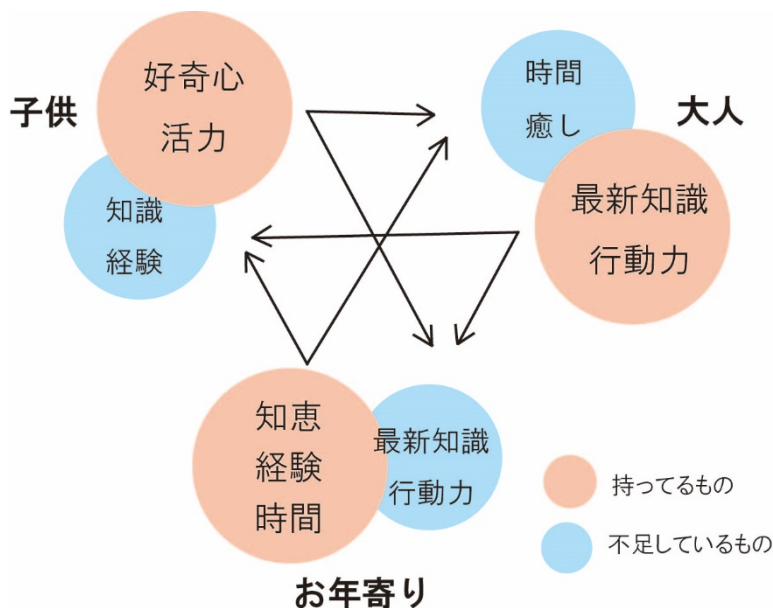
【子供・大人・お年寄りの理想の相互関係】

この解決の一つの方法は、地域の住民同士の繋がりではないかと思う。私の町に限らず、最近はこの繋がりが薄くなっており、中でも自分と違う世代の人と話す機会はほとんど無くなってしまったように感じる。学校、子供会、町会、婦人会、敬老会など、それぞれの世代の集まりや活動はあるのに、違う世代との交流はあまりない。なぜなら、活動の時間や目的も場所も違うからだ。

しかし、よく見ると、それぞれの世代にとって豊かに持っているものと、不足している(困っている)ものがあることに気づく。

例えば子供は、新たなことへ挑戦する好奇心や、周りに元気を与えるような活力を持っているが、知識や経験はまだ無い。大人は、車や電車を使って移動する行動力や、最新機器への知識があり、経済的にも豊かであろうが、毎日の仕事で時間も心の余裕も無く疲れているだろう。逆にお年寄りには、昔ながらの知恵や培ってきた経験、時間や心の余裕はあるが、最新機器にはついていけず、体力や行動力は低下気味、一人で淋しさを抱えている人も多いだろう。

これを下の図にまとめてみた。



ここで私は、子供だから出来る、大人だから出来る、お年寄りだから出来る、その世代だからこそ出来る能力を十分に発揮して町の役に立ち、逆に困っていることは他の世代に助けて貰う、そんな助け合える仕組みを作ることはできないかと考えた。

これが可能になれば世代間に交流が生まれ、人の役に立つ喜びが生まれ、子供が人として育つ土壌が生まれる。

そんな町なら愛着を持ってずっと住んでいたいと思うようになるだろう。

【好意と行為のブツブツ交換】

ここで私の提案する「好意と行為のブツブツ交換」とは、お金ではないものを使って日常生活の中で生じた困ったことや、助けてほしいことなどのやり取りを行うシステムだ。その仲立ちをするものを、「Thank you medal」と名付けよう。困ったときは Thank you medal を渡して誰かに助けてもらい、困っている誰かを助けたら Thank you medal を受け取る。要するに「好意」と「行為」のブツブツ交換である。

地域住民の繋がりを目指すものなのだから、メダルは直接の受け渡しを原則にしたい。その時会話の花が咲くことだろうし、数回続けばもう立派な知り合いだ。

例えば、

おばあさんが、若いお母さんに携帯の設定を教えてもらった一枚。

逆に子育てに困ったお母さんが、先輩であるおばあさんに相談に乗ってもらった一枚。

老夫婦が、若いお父さんに高くて届かなかった部屋の電球を替えてもらった一枚。

授業で昔遊びを習った子供達が、おじいさんにけん玉のコツを伝授してもらった一枚。

子供が、足の不自由なおじいさん家の庭で1時間草むしりをしたらそこでも一枚だ。

一つ一つの行為の、質や量の違いは気にせずに基本一枚だ。本当はメダルのやり取りをしないのが最善だと思うが、それだと頼むのに気が引けたり、後のお礼に気を使うから遠慮する人もいだろう。そんな遠慮の壁を取り払ってくれるのがこの Thank you medal なのだ。そう考えると、これは町の中でのいろいろなことにも応用できることに気付く。

町には地域の清掃や廃品回収、町会の役職、消防団など、様々な役割があるが、順番が回ってきても仕事の都合がつけられずに欠席してしまい、肩身の狭い思いをしている、という話を聞いた。そんな時は貯めておいた Thank you medal を一枚、町のために出す。お互いの気が多少は晴れるかも知れない。また、子供が熱を出したのに会社にも行かねばならず、近所のおばさんに頼んだシングルマザーもいだろう。その時ばかりは預かってくれたお家に5枚置いてこよう。

こうして誰かが困ったとき、別の誰かが手を差し伸べやすくなるのだ。

現実での受け渡しが原則だけど、運用にスマートフォンのアプリを導入することも有効だろう。ネット上に掲示板があれば、回りに SOS を出すのも、それに誰かが応えるのもリアルタイムで可能になる。

こうして Thank you medal が町の中を回れば回るほど、町は暮らしやすくなり、知り合いも増えていく。

【公園で行うブツブツ交換】

もうひとつ提案したいのは、この仕組みを有効に使うための場所としての公園だ。このシステムの中心の場とするのである。

なぜなら、公園は様々な世代の人が利用し、好意と行為のブツブツ交換をするきっかけになるものが多いからだ。そしてそこには Thank you medal を扱う電子掲示板を設置したい。その月の獲得メダル数をランキングにしてもおもしろいし、これから行われる共同作業のスケジュールとそのメダル数が書いてあるのも便利だ。また、スマホを使わないお年寄りがネット上にメダルを預けたり、残高を確認できるとよい。

肝心の公園には子供たちの遊具の他に、毎年何度か地域で行うイベントのための広いイベントスペース、お年寄りが好きなものを育てるミニ農園、婦人会で育てている花壇、皆が腰を掛けて会話を弾ませる石垣のベンチなど、様々な世代が訪れやすい設備を設置する。

そしてイベントスペースでは、毎年何度かイベントを行う。地域のお祭りのイメージだ。そしてイベントや公園で Thank you medal は次のように使われる。

今回のイベントは餅つき大会。餅つき大会では Thank you medal を使ってお餅を食べたり飲み物を貰うことができる。その日までに毎週末行われるごみ拾いや草むしりに参加したり、違う世代とのブツブツ交換で Thank you medal をたくさん貯めておこう。そしてこの日ばかりはメダルを使ってお餅を食べ、ゆっくりする。日頃の行いが報われるひとときである。逆に、日頃忙しい人は、大会当日は運営側に回りその場でメダルを得てもよい。

そして最大の楽しみは、Thank you medal を交わして知り合えた人たちとの再会である。「その後家の不具合ありませんか」「赤ちゃんは元気?」「おじいちゃん次は将棋を教えてね」など、会話に花が咲くだろう。このようにイベントを終えた後には、違う世代同士でコミュニケーションの輪が出来ている。

もちろん普通の公園でも Thank you medal は活用する。子供が年上の子に虫の取り方を教えてもらいたい時や、おじいさんがミニ農園に苗木を植えるのを、子供たちに手伝ってもらいたいとき。

そしてミニ農園でとれた野菜や果物はメダルと交換で販売し、町会のメダルとする。これは町の共同作業に参加した人に配るためのものになる。

【Thank you medal の効果】

このように Thank you medal を活用すれば、ごみ拾いや草むしりなど町の共同作業を強制することなしに行なえるだけでなく、それぞれの世代が持つ役割を果たすことができると思う。子供は貯めたり、集めたりすることが大好きだ。いつもは面倒くさがりな子供でも夢中になって medal を貯めようするかも知れない。それはそれで良いことだ。なぜなら

町の誰かが助かっているということだから。

日頃忙しくて作業に参加できず、後ろめたい思いをしている働き盛りの大人も、どこかで Thank you medal を得られるチャンスがあるはずだ。例えば足の不自由な老夫婦の週末の買い物を手伝ってあげてもよい。

また、引きこもりがちな一人暮らしのお年寄りも「メダルがないのも恥ずかしい」を口実にと参加してくれるかもしれない。お年寄りが町に出てくるそんなきっかけになればよい。

こうしたやり取りはお金じゃないから、気持ちがいい。やり取りしているのは、自分の好意や誰かの好意だ。こんな好意と行為のブツブツ交換は公園から町中に広がり、日常生活の中で困ったことや教えてほしいことを気軽に頼み合えるようになり、知り合いが増え、最終的に町への愛着につながっていく。

【最後に】

10 数年後の町を想像してみる。

子供は大人になり、自分の子供を連れてあの公園に訪れる。

Thank you medal は変わらず存在し、いろんな住民のもとを回ってる。

公園のイベントは毎回大盛況。

今年はミニ農園の里芋が豊作だったので、次のイベントは芋煮らしい。

お父さんが子供の頃に夢中で遊んだけん玉は、今度は子供がはまっている。

お母さんが今はもう亡くなってしまったおじさんと植えた苗木はカキの木だった。

たわわに実ったカキは干し柿にしよう。

石垣のベンチの中心に立つ桜の木は、今も変わらず皆の会話の中心に立っている。

住み続けるって素晴らしい。
好意と行為のブツブツ交換が、世代間の交流を生み、町への愛着を強くし、住み続けるきっかけになるだろう。このように住み続けるからこそ感じられる、町を大切に思う気持ちを多くの人に感じてもらいたい。

